でいかねばならない。

本書については、おそらく様々な立場からの批評が加えられることになると思う。それは、著書の主張が明確でしかも新鮮・大胆であるからであり、また本書がすぐれて高度な内容をもっているからである。七〇年代の終わりを飾るにふさわしい労作であることを、あらためて指摘しておきたい。なお、著者には本書ととくに深く関わるものとして、「倭からヤマト政権へ」（『日本と朝鮮の古代史』、一九七九）、「東アジア諸国家の形成と国際的政治世界」（歴史学研究別冊特集『世界史における地域と民衆』、一九七九）があるので、あわせて参照されるとよいと思う。

（B6判　二五〇頁　一九七九年九月
塙選書　一七〇〇円）
（西山良平　日本学術振興会奨励研究員）

S・ギーディオン著
前川道郎・玉腰芳夫訳
『建築、その変遷――古代ローマの建築空間をめぐって――』

本書は、Siegfried Giedion, *Architektur und das Phänomen des Wandels—Die drei Raumkonzeptionen in der Architektur* (Tübingen, 1969) の邦訳である。著者ギーディオンはスイス人の建築・美術史家で、世界の建築界に多大の影響を与えた *Space, Time and Architecture—The Growth of a New Tradition* (1941) 他の著書があり、そのいくつかは邦訳されてもいる。彼は既に一九六八年に世を去っており、本書は彼の死の翌年に出版された遺著の邦訳である。

この邦訳では、訳者により意図的に副題が改められているが、原著の書名を直訳すれば『建築と変遷の現象――建築における三つの空間概念』となるように、著者ギーディオンは建築における三つの空間概念の展開段階を区別する。著者自身本書の序論で述べており、訳者あとがきにも解説されているが、ギーディオンは一九四一年出版の *Space, Time and Architecture* において、バロックの空間の論議より始めて、第三の空間概念の開始期としての近代の時空概念に支えられた建築として、内部と外部の空間の相貫現象を詳論し、次に、一九六二年の *The Eternal Present: The Beginnings of Art* において、第一の空間概念としてエジプトとシュメールを中心に、彫塑的形態としての外部空間の建築を論じた。そして遺著となった本書において、第一の空間概念の最終段階としての古代ギリシアの建築空間をも論じながら、しかも近世につなぎつつ、焦点を古代ローマに合わせて、内部空間としての第二の空間概念の建築を詳しく論じているのである。したがって本書は古代ローマ建築史の極めてユニークな書になっているのであり、そこに、訳者をして副題を改めせしめた理由の一つが存するのである。

本書の内容を簡単に紹介すれば以下のようになる。序論に続いて第一章では、彼のいう第一の空間概念のうちの最終相であるギリシアの建築が論じられ、第二章では、第二の空間概念への移行期が取り扱われる。そして、第三章が第二の空間概念を扱う本書の主章というべき部分である。第二の空間概念とは、古代ローマ、中世、ルネッサンスそしてバロックに共通する空間概念で

あり、その力点は、内部空間に、つまり空間を刳り出すこと、同時に、そこに開口部をつくることにあった、と著者はいう。この第二の空間概念の始まりが帝政ローマの建築である。第三章は十一節に分かれ、そのうち第三節より第七節までは特に技術の発達が考察されていて、大建造物を可能にしたコンクリートの発見とそれに基づく壁体工法の発展、アーチやアーチ門の発達、第二の空間概念を出現せしめたともいうべきハドリアヌス帝のパンテオン（汎神殿）を中心とするヴォールト架構の新たなる展開、都市構造を変化させもした壁の穿口などについて、熱っぽく語られる。続く二節では、「私的生活の構成」と「公的生活の構成」が論の対象となっており、前者については、個人生活の新しい形式の形成を示すハドリアヌス帝のヴィラや、紀元二世紀のローマの共同住宅などがとりあげられ、後者については、民衆の保養とリクリエーションのための施設たるアムピテアートルム（円形闘技場）やテルマエ（共同浴場）が論じられており、アムピテアートルムにおいては言うまでもなく、今日コロッセーウムの名で呼ばれるフラウィウス朝のそれが特に詳説されている。最後の二節では、中世及びルネッサンス、バロックにおけるローマの建築思想の継承が述べられる。第四章は前章をうけて移行の諸現象が語られ、最後の第五章では、第三の空間概念――彫刻と内部空間としての建築――が説かれている。

紹介者は帝政ローマの歴史研究に従事する者で、建築学については全くの門外漢であるため、本書に対する立ち入った論評はできないが、一読してみて著者の根本的な主張の明快さが強く感じられた。それは、訳者も鋭く指摘しているように、近代科学技術の発展に支持されて近代建築を推進した著者ギーディオンが、ローマの建築空間をも技術の発達とその勝利によって説明しようとしているからである。中世が特に技術的側面でローマの水準を喪失したために、ローマから中世への移行に著者は断絶を認めるのであり、ローマ帝国から我々の時代への移行は、ローマから中世への移行に較べてはるかに直接的である、とするのである。このような見方が一面的なものであることはいうまでもないが、「ローマ帝国の建築は、十九世紀と二十世紀に対する、いや、さらにわれわれが生きる時代全体に対する序曲を形成する。」として、建築を通して我々の時代に対するローマの直接的かかわりを問うた著者の主張は、歴史を研究する者に、反省とより広く深い見方を提示することを強く求めているにちがいない。

総じて、紹介者のように記述史料中心にローマ帝国像を描いている者にとっては、本書から教えられるところが実に多かった。二四五枚に及ぶ図版は本書の理解を大いに助けるものであり、また巻末には多数の訳注が付されていて、本書で扱われる時代の歴史や文化に不案内な読者にもなじみやすいように配慮されている。このような貴重な書物の邦訳が刊行されたことを慶ぶとともに、訳出された京都大学の二教官の労を多としたい。建築学あるいはローマ史の専門家ばかりでなく、広く西洋文化に関心のある人々にとって益するところ大の一書で

ある。是非一読を乞う。

（四六判　四八七頁　一九七八年五月
みすず書房　六〇〇〇円）
（南川高志　京都大学大学院生）

上智大学イベロアメリカ研究所発行『イベロアメリカ研究』創刊号

近年、日本のラテンアメリカ研究の発展には、めざましいものがある。たとえば、一九七九年三月には『歴史学研究』においてはじめて「ラテンアメリカ近現代史の諸問題」小特集が組まれ、また一九八〇年六月には、歴史をはじめあらゆる研究領域を網羅する〈ラテンアメリカ学会〉の発足が予定されている。そして一九七九年七月には、待望久しいラテンアメリカ専門誌『イベロアメリカ研究』（年二回発行）が、上智大学イベロアメリカ研究所の手によって創刊された。本誌六一巻四号において紹介した『LA研究』（季刊）がこれまでほとんど唯一のラテンアメリカ専門誌だっただけに、この刊行のもつ意味は大きい。

ところで創刊号は、左記のとおり、四篇の研究論文、二篇の研究ノート、資料欄および研究所ニュースから構成されている。

グスタボ・アンドラーデ著「一九七〇年代ラテンアメリカ政治の新しい潮流——軍部・教会・カーター外交——」

水野一著「一九七〇年代のラテンアメリカ経済——その変化と問題点——」

Celso Furtado, "Causes and Consequences of the Brazilian Economic Miracle: Negative Aspects of the Model"（フルタード著「ブラジルの経済的奇蹟の原因と結果——そのマイナスの側面——」）

エラルド・ムニョス著、辻豊治訳、「従属——帝国主義論争における変化と連続性（一）」

三橋利光著「メキシコ革命前の中産階級の位置づけ——ポルフィリオ期を中心として——」（研究ノート）

二村久則著「ラテンアメリカの反米思想——マルティとロドーに関する若干の考察——」（研究ノート）

〈資料〉日墨共同声明（一九七八年一一月二日付）

〈資料〉日経新聞に掲載されたエルサルバドル・ゲリラの声明

〈資料〉日本—ラテンアメリカ関係日誌（一九七八年）

この目次ほど、同誌の性格を端的に表わすものはないだろう。第一に、研究論文に限られないその構成からは、同誌がラテンアメリカに関する総合的な情報誌をめざそうとしていることが見てとれる。そして三篇の論文、すなわちアンドラーデ論文、水野論文およびフルタード論文が研究所主催のラテンアメリカ事情公開講座における報告論文であるという事実は、同誌が〈開かれた研究誌〉をめざしていることを示すとともに、この創刊が着実な日常活動の所産であることを明らかにしている。

個々の論文の内容に立ちいる紙幅の余裕はないが、気鋭の研究ノート二篇に触れることにする。

まず二村論文は、アメリカ帝国主義成立